

TOSAIBOTIMES

2010年03月29日発行
編集者：TOSAIBO TIMES 編集委員会
編集長：生原 勇
発行者：上原 泰男
東京災害ボランティアネットワーク
〒164-0011 中野区中央 5-41-18
東京都生協連会館 3階
tel:03-3380-1614 fax:03-3380-1615
E-mail:office@tosaibo.net



阪神・淡路大震災から15年。思いを新たに

1995年1月17日の阪神・淡路大震災から15年の月日が経とうとする2010年1月16日、千代田区有楽町にある東京国際フォーラムで、阪神・淡路大震災の犠牲者を悼み、次の災害に備える市民防災イベント「いま、わたしたちに、できること。2010 KOBE MEMORIAL 1.17 灯りのつどい」が開催されました。

1999年から都内各地で開催されているこのイベントは、誰もが気軽に参加でき、ほんの少し阪神・淡路大震災や災害について考える場として開催されています。

最大の特徴は、わざわざ参加することなく、数分の参加が可能という点。イベントのステージエリアとなる場所では、日本ハンドベル連盟にご紹介いただいた玉川学園ハンドベルクワイアの皆さんなどが演奏していただき、その脇では阪神・淡路大震災をはじめとした被災地の様子が大型スクリーンに映し出されています。また、代表的な被災者支援活動といえる炊き出しとしてお汁粉が振舞われ、災害に関する小さな防災クイズ、各被災地で被災地・被災者支援活動をしている団体から提供いただいた写真パネルの展示、丸の内消防署から借用いただいた煙体験ハウスが設置されるなど、そのいずれもが数分で体験できるプログラムが実

施されています。

イベントの最大のプログラムは、「1.17 灯りのつどい」。毎年1月17日に合わせて神戸市中央区の東遊園で実施されているイベントと連動して実施されているプログラムです。阪神・淡路大震災が起こった午前5時46分の12時間前となる1月16日午後5時46分に、約500本のロウソクと、竹・ガラス・ペットボトルが用意され、「1.17 KOBE」と灯り文字が作られました。

このときばかりは、参加された方々も足を止め、ロウソクの灯りを前に黙祷される方が多かったのが印象的でした。

東京災害ボランティアネットワークでは、毎秋に開催している「帰宅困難者対応訓練」と、この「1.17 イベント」と恒例の行事として大切にしています。帰宅困難者対応訓練が具体的な課題に対する取り組みであるのに対して、1.17 イベントは、1月17日をきっかけとして、より多くの方々に「災害」や「防災・減災」を思い返していただきたいと考えています。

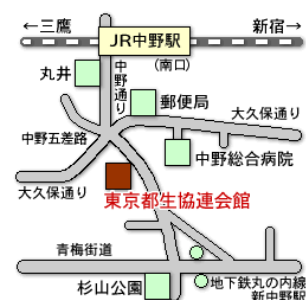
この日、数分でも参加して下さった方々が、家庭や職場で「今日(昨日)、有楽町でこんなイベントがやっててさ」と小さな防災談義ができるようになればと思っています。(福田)

東京災害ボランティアネットワーク事務局

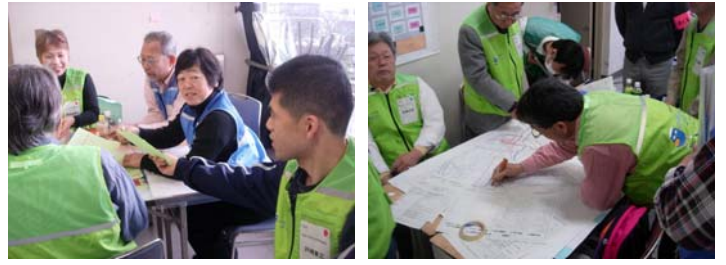
〒164-0011 中野区中央 5-41-18 東京都生協連会館 3階

tel:03-3380-1614 fax:03-3380-1615

E-mail:office@tosaibo.net



第五回静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練 参加報告



去る2010年2月27日(土)、28日(日)に静岡県市民文化会館にて、東海地震を想定した図上訓練が実施されました。“受援力と連携”というテーマのもと、静岡県内外から300人以上の方が集まって行われました。

○実情に近い形での訓練を実施

災害時、静岡県では、各市町にボランティア本部、広域に複数の市町を対象とする支援センター、県内全域を見る県本部と三つの役割を持った拠点が設置される計画になっています。訓練も、それに即した形で進められました。会場では各市町や組織ごとにまとまりがつくられ、訓練テーマでもある“連携”を意識して、訓練上のやり取りが活発に行われておりました。

“連携”は耳にしたり、使ったりする機会が多くなってきてはいますが、実はなかなかどうして難しいことが訓練の中で感じられました。ただ、訓練の中で、解決しなければならない課題というものが浮き彫りになるのはとても良いことです。

○支援センター？

この訓練が始まる時点では、広域に複数の市町を対象とする「支援センター」は、立ち上げる場所は決まっておりましたが、広域を対象として活動を行う拠点ということ以外、機能や役割は明確化されていませんでした。この訓練を進めていく中で、「これは支援センターの役割」「このようなことも支援センターで行えるのではないか」というような気付きを得ていった一方で、市町のボランティア本部等とのすみ分けが進められました。

このように、形は決まっても、実際に具体的な中身までは決められていないということは少なくないと思います。そのような部分を日頃の訓練を行う中でお互いに確認しあい、いざ災害が発生した際に生かせる仕組みづくりが行われていかなければなりません。東京でも同じことがいえるのではないのでしょうか。

○縦の連携だけでなく、横の連携も必要

県単位から始まり、複数の市町を対象とする広域のセンター、市町のボランティア本部…というようにある地域に対して役割に沿った関わりを行うための縦の連携は大切なことです。しかし、市町同士や市内における他団体とのつながりなど、ある地域に対して様々な視点、角度からアプローチしていける横の連携もとても重要なものとなります。今回の訓練ではその部分まで踏み込んで考える時間はありませんでしたが、今後取り組むべき課題の一つではないでしょうか。

○顔の見える関係づくりは大切

今回の訓練において、県内と県外の参加者が交わったことは、災害時を考えると、とても大きな意味を持っています。被災地内だけで対応できることはそれほど多くないわけで、それはこれまでの被災地が教えてくれています。特に、このような具体的な訓練を通じ、様々な団体同士が、顔の見える関係を作っていくことは、単に顔が見えるだけでなく、団体の特色もよくわかります。

実際に日頃から訓練を行っている地域同士では、相互のことを気かけつつ訓練に参加している場面も見受けられ、普段のつながりが出来ていることの重要性を改めて確認することが出来ました。

東京では、各地域のボランティア関係者が一同に会して実施する訓練というのは、実施されたことがありません(首都圏統一帰宅困難者対応訓練がそれにあたるかもしれません)。しかし、それぞれの地域や団体で取り組んでいる方々は数多くいるはずです。

いつの日か、可能な限り災害が起こる前に、今回の訓練のような取り組みが実施できれば。そんなことを強く感じました。

(TVAC 宮田)

コラム<TOSAIBO TIMES 編集長ハイバラのお言葉> 「在る者」と「成る者」

旧約聖書「出エジプト記」で、神はモーゼに民を連れてエジプトを出でよと言う。モーゼは「あなたの御名は」と問う。「在る者」。神はこう答えた。

犬養道子は、「在る者」＝神とは「死なない者・限界をもたぬ者・いつも生きる者」、つまり充実した生命そのもの。時や場に縛られぬ者。したがって自由なる者という。そしてまた神は時の流れの中でうつろい変わることはない、世々、同じ「神」。いつも満ち満ちている者。「聖」とは「救い」の語同様に、「無限なる健やかさ」に通ずる語だという。

これに対し私たち人間は「成る者」である。同じく犬養は「成る者」とは「人間は赤ん坊から子供に成り、青年と成り、さらに中年・老年者に成ってゆく～人間という『なっていく者＝体験の動物』と対比する。

長々と犬養の「聖書の天地(新潮社)」から引用したのは、初読したとき、この「成る者」、「成っていく者」という短いフレーズが私をいまさらのように深く捉えたからである。このコラムとの関連を言えば、東災ボの企画や会議の中で頻繁に出てくる言葉、「気づき」について考察したいからである。

気づきは気がつくとは少し違う。気づきとは、体験を通して人間のいわば本能的なところにそれを収めること、そしてそこに収めた気づきを生きるために引き出すことだと思う。

東災ボの事業を見ていると少し違和感を覚えるものもあるが、その存在の中核に、一人でも多くの人に、自分や家族、そして地域社会の人々の命と暮らしを守るための「気づき」をひろげるという目的がある限り、東災ボの存在は有用である。(ハイバラ)

災害ボランティア養成講座のこれから

第9期COOP災害ボランティアリーダー養成講座 修了に寄せて

災害＝ボランティア活動

災害が起こるとボランティアが被災地支援活動に取り組み、被災者に大いなる勇気と元気を与える。ここ数年、当たり前のようになってきた事実であり、多くの市民が共有するようになってきた事実である。

人が人を支えるとてもわかりやすい取り組みであり、被災者と接することで支援するという意味では、最も被災者に近い存在となるのが災害ボランティアといえる。マスメディアは、そうした被災地支援ボランティアの特徴をよく理解している。災害後に設置される災害ボランティアセンターは格好の取材対象となり、ボランティアと共に被災者を訪ね、その声を拾うこともしばしばである。

行政機関も、これまでの被災地で報告される災害ボランティアの意義について大きな期待をしている。各自治体の地域防災計画の中には必ず「ボランティア」という項目が設けられ、ボランティアによる被災者支援を復旧・復興に役立てられるように様々な整備を始めている。

災害ボランティア養成講座

その一つに、災害ボランティアの養成がある。

都内でも、各自治体と災害時におけるボランティア活動について協定を結んでいる社会福祉協議会をはじめとした各団体が災害ボランティアの養成講座を実施している。

しかし一方で、災害ボランティアの養成とは何をすればいいのかが明確になっていないという側面もある。厳密にいうと、災害ボランティアとは何なのかすら明確になっていないともいえる。

災害が発生すると、被災者支援をするという大まかな取り組みは、これまでの被災地で明らかになっているが、具体的な取り組みの内容となると、その災害の規模や場所、種類によって千差万別である。養成が必要だといっても、誰をどう養成するのか、その答えはないといっても過言ではない。

COOP災害ボランティアリーダー養成講座

養成講座実施主体がそんなジレンマを抱えながら手探りで取り組んでいる災害ボランティアの養成だが、東京都生活協同組合連合会は、生協職員・組合員を対象としたCOOP災害ボランティアリーダー養成講座を9年前から実施している。

当初は、いずれの実施主体と同様に手探りであったが、9年間続けて実施してきたことで、ミッションを明確化し、プログラムの内容、修了生へのフォローなども試行錯誤しながら歩んできている。

COOP災害ボランティアリーダー養成講座では、「一人は万人のために、万人は一人のために」「一人ひとりを大きな力に」など、一見すると、災害ボランティアの養成とは思えないようなミッションを掲げている。講座の内容も、災害ボランティアセンターの運営に関わるプログラムや、事業体としての生協の

BCPなどとはかけ離れたプログラム構成となっている。あくまでも一人の市民として「災害に備えるとはどういうことなのか」を受講生自身が考えていけるプログラムとなっている。

ここ数年は、全8回で半年にも及ぶ講座にも関わらず、7～8割の受講生が修了している(修了は7回以上の受講)。また、35～50名の受講生をいくつかの班に分け、班内での交流を大切に、個性を持ったお互いが意見を交換できるよう工夫をしている。月一度の講座であるが、「来月も元気に会おう」とお互いに励ましあいながら講座を受講し続けている。

9年間で修了生は300名を超えている。

継続は力なり

そんなCOOP災害ボランティアリーダー養成講座であるが、先述の通り、9年前から講座の内容が固まっていたわけではない。9年間の継続が講座の内容を成熟させ、目指すべき方向を指し示したといえる。

災害ボランティアだけではないが、いわゆるボランティアの養成は容易ではない。自発的な活動が前提となるボランティア活動においては、養成講座を修了するとボランティアになれるというものではない。養成講座を修了していても既に様々な活動を実践している方々はおられるし、修了証が御免状となるわけでもない。また、ボランティア養成が、ある種の思惑のためにおこなわれるのは論外ともいえる。

そう考えると、ボランティアの養成は非常に難しく、上手くない可能性も高い。

しかし、それでもボランティアの力を信じ、つまりボランティアの力が被災者の力になると信じ、この講座を組織として継続的に取り組んできた東京都生活協同組合連合会。さすが「被災地に生協あり」といわれた組織である。

9年もの間、継続して取り組めた背景は、その先見の明と、信じる力、そして、その組織力の成せる業であろう。

地域へ

COOP災害ボランティアリーダー養成講座を修了すると、COOP災害ボランティアネットワークの一員となる。

養成講座で学んだ知恵や知識、そして大いなる気づきを次のステージへ活かすことがCOOP災害ボランティアネットワークには求められている。生協というつながり(メンバーシップ)で、集まり得た気づきを、次は、それぞれの地域で活かそうと動き出している。

COOP災害ボランティアリーダー養成講座は修了して終わりではなく、次への始まりとなっている。

地域への足がかりはそれぞれバラバラかもしれない。時間がかかるかもしれない。しかし、この講座で得た気づきは必ず地域で活かされる。そんな講座がそれぞれの団体・地域で実施されれば、災害時の大きな力になるのではないだろうか。

(福田)



みやげじま<風の家>の新たな出発を祝う

みやげじま<風の家>は、さる2月5日、新たな運営環境のもとで再出発をいたしました。

この<風の家>の運営環境の見直しについては昨年の東災ボ総会の中で論議いただき、その後、三宅島内で<風の家>を支えてくださっているスタッフ・運営協力員の皆さま、三宅島社協・三宅村などの関係機関の皆さま、そして私たちが最も大切にしてきた利用者の皆さまと、半年にもおよび慎重に議論を重ねてきました。

2005年の帰島支援事業に続き、その秋10月より高齢者の方々と、ほんの少しのサポートが必要な方々の集いの家として<風の家>の開設がおこなわれました。この間、多くの在京団体の皆さまの財政支援に支えられ4年3ヶ月もの間、大きな事故もなく、日々「仲良しとやさしさ」に満ち溢れる場所として開設が続けられました。

しかし、現実的に、島内の重要な課題となっている高齢者支援課題、および障がい者支援課題に対し、自立的に地域住民が取り組めるための運営環境の見直しの必要性を島内関係者、在京支援団体の双方が認識したことにより、新たな運営は、従来の有償スタッフの配置からボランティア型のスタッフ配置へ変更し、開設日毎週2日と島内自立型に努力していきつつ、引き続き在京団体との交流事業を通じた様々なご支援をいただきながらのものとなります。

このような協議を経て、2月5日の新たな<風の家>の出発を祝う会が開催されました。

当日は平野三宅村長、佐藤副村長、寺本三宅島社協会長、東京都三宅島保健所・三宅村保健所の保健師の方々、島内介護事業所の

方々など、多数の島内関係者にご参加いただくことができました。もちろん、これまで<風の家>を利用してくださっている方々や運営に関わってくださっているボランティアの皆様も大勢参加くださいました。

また、この祝う会では、在京団体の立場から、東京都生協連の竹内専務理事が参加くださり、2000年の噴火災害から今日までの、島民の方々と在京ボランティアとの深い交流の意味と、今後の<風の家>に期待する思いを語っていただきました。

その後は、参加者全員で歌を歌い、一緒に食事をするなど、いつもの<風の家>がそこにありました。

これからも、みやげじま<風の家>をよろしく願います。
(上原)

みやげじま<風の家>

開設日 : 毎週火曜日・金曜日

開設時間 : 午前九時～午後三時



2009年首都圏統一帰宅困難者対応訓練 実施報告書 完成!!

2009年首都圏統一帰宅困難者対応訓練の実施から半年、やっと実施報告書が完成いたしました。関係の皆様にはご迷惑をおかけいたしました。昨年度までの実施報告書とは異なり、読みやすく工夫を凝らした報告書となっています。

すでに今年の訓練についてもいくつかの団体の方々からお問い合わせをいただいておりますが、この報告書を各団体に配布すると同時に、意向をお聞きしながら概要を詰めていきたいと考えております。大まかな企画が固まり次第、関係の皆様にもお声かけさせていただきますので、その際はよろしくお願いいたします。

なお、3月18日に開催された内閣府主催の「防災ボランティア活動検討会」で、この報告書を参考資料として配布させていただきました。様々な団体が信頼に基づいた連携と協働を実践した取り組みとして、非常に高い関心をいただくことができました。

編集後記

●プロの日刊紙の後追いをする必要はさらさらないが、また〇月〇日発行と肩ひじ張って決めてかかることもないだろうが、とりあえずはユルユルであっても「月一」は目指したいもの。●そこで、某月某日都内某所において、生原編集長の下嶋首凝議と相成った次第。幸い(?)にして喧々譁々、興奮のあまり「……フクっ…お前の……」——口角泡を飛ばすような状況には至らず、そこは紳士然としてユルユルと会議は進行。●発行に責任を持つ編集委員会を事務局会議とは別に開催すること、編集長が編集方針を編集委員会に提案・討議→事務局会議にその内容を提案・討議したのち、その場で原稿を割り振る(原稿発注)。そして入稿・レイアウト・校正・発行という流れを管理する進行管理者をおくことに。●まっ、当たり前のことが決まった次第。やはり定期にニュースを出すことは会員団体の皆様への義務と心得ます。定期に出し続ける経験を蓄積していくことで紙面の充実も図れるものと考えます。乞うご期待!

(ナリ)

東京災害ボランティアネットワークとは?

1995年の阪神・淡路大震災を契機に、1998年1月に設立されたボランティアネットワーク。災害救援活動や防災・減災活動、ボランティア団体やNPO団体に限らず、様々な形で様々な課題に向かって活動している団体が、災害前に「顔の見える関係」を構築していくことを目的としている。構成されている団体は、ボランティア団体・NPO団体をはじめ、労働団体、消費者団体、社会福祉団体、海外支援NGO、企業と多岐にわたる。

これまで1998年福島豪雨災害や2000年三宅島噴火災害、2004年新潟水害、新潟県中越地震、2005年三宅島帰島支援など、様々な被災地で被災地支援活動・被災者支援活動を展開。

また、各被災地で気づかされたことを東京での防災・減災活動に生かし、都道府県行政、市区町村行政、社会福祉協議会、企業、そして地域の学校・町会などの地域団体と共に、災害といのちとくらしを想像して、考えて、実践していく小さな「気づき」の取り組みを実施している。

2009年5月現在80の団体が参加。

